

令和4年度 学力向上指導改善プラン

志手原小学校長 山本 克之

学校教育目標		自ら学ぶ意欲と方法を身に付けた心豊かな志手原っ子の育成		4月			2～3月	
推進主体		学力向上委員会		学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 (指標となる数値等)	具体的な行動目標 (成果目標達成のための具体的な手立て等)	年度末評価	
学力に関する前年度の状況・経年の課題等							（今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
学 力 の 状 況	全国学力・学習状況調査結果の状況 (国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む)	国語	○学年別配当漢字は定着がみられる ○目的に応じてスピーチの構成や資料を用いることができる △比較して説明する語句で、同じ使い方をした文を捉えられていない(語彙力) △「読むこと」の領域で、要約する力に課題がみられる △意見を書くことはできるが、理由を添えるなど根拠を示して意見を述べるのが難しい	・語彙力の向上 ・文章を要約する力の向上 ・根拠を明確にした論述する力の向上	○実生活の様々な場面に じて、論理的に書いたり、考 えを伝えたり、言葉を適切に活 用することができる。	○教科書の各単元末にある言葉の力を適宜応用し、授 業の中で、書いたり、話したりする機会を多く設け、習熟 を図っていく。 ○登場人物の相互関係や心情・場面についての変化を 読み取ったり、文章を読んで考えたことについて、交流し たりする学習活動を学年の発達段階に応じて取り入れ ていく。 ○学校司書と連携し、学習内容だけにとどめず調べ学 習や多読につなげ、学校図書館を活用した学習を進め る。 ○対話的な学びの場を取り入れた授業構成を定着させ る。(ICTの活用含む) ○めあて・自力解決の方法・ふりかえり等のあるノート指 導を行う	○ノートの振り返りや自主学習等、自分の考えを整理して表現する場の設定やICTを 活用して発表する機会を通して、論理的に考えたり、言葉を適切に活用したりする学習 に繋げることができた。 ○登場人物の相互関係や心情・場面についての変化を読み取るなど、学年の発達段 階に応じて、各単元末にある言葉の力を適宜応用して、学習活動に取り入れることが できている。 △「読むこと」の領域で、要約する力に課題が見られる。 △自分の考えを表現するために、根拠を基にして論理的に書くことに課題が見られる。 △話し合い活動を設定するなど、コミュニケーション能力を高める学習を充実させてい きたい。	B
		算数	○「数と計算」領域では、問題場面に着目して計算方 法を考えることができる ○図形の面積の公式が定着している ○基礎的な計算の力が定着している △図やグラフ、文章を基に情報を関連付けて、条件を 整理することに課題がみられる △式の意味を言葉で説明したり、図表と式を結びつけ て説明する力に課題がみられる	・図やグラフを基に考える力の向上 ・式の意味やそれを説明する力の向 上	○実生活の様々な場面にお いて数学的な見方・考え方を 働かせて問題解決に活かす ことができる。	○目的に応じて数、式、図、表、グラフ等を活用しつ、根拠 を基に筋道を立てて考え、問題解決をする学習を進める。また、問題解決に至る過程を説明する機会を設ける。 ○テスト後には、誤答を解説して直しをさせることで児童一人 一人が自分の間違いを認識し、次の機会の誤答を減らすこと ができるようにする。	△学習問題を考える時に、図や表、グラフと関連付けながら、根拠を基に考える事を意 識させているが、まだ十分にできていない様子が見られる。 ○発表する時に、答えだけでなく式や言葉を用いて、問題解決に至る過程を説明する 機会を設けている。	B
	定期テスト、単 元テストなど による状況(各教 科)	○概ね、どの教科も基礎的な力についてはついてきている △漢字においては、筆順の違いや似た文字と間違 えたり、同音の漢字と混同していることも見受けられる △知識ではなく、様々な情報や条件から思考する問 題には苦手意識をもっている児童も少なくない	・漢字の使い分けができるようにする ・思考力を問われる問題に対して、情報や 条件から考える力の向上	○前の学年までの配当漢字を9 割程度理解することができる。 ○学習課題に応じた解決方法を 考え、取り組みことができる。	○テストやプリントなどの学習後に誤答を直しをさせること で児童一人一人が自分の間違いを認識できるように する。 ○国語や算数などの学習課題について、根拠を基に解 決方法を考える習慣をつける取り組みをする。	○宿題プリントやドリル、iPadを活用した学習(ドリル等)、基礎的・基本的な計算や漢 字の学習をする機会を多く設定することができる。 ○国語の各単元末にある言葉の力を適宜応用した授業作りや算数の図や表、式を活 用した課題解決を意識した授業作りができています。	A	
	授業等からうか がえる状況(各 教科)	○難しい問題にも、粘り強く取り組むことができるよ うになってきている △学年が上がるにつれて、書字が雑になってくる児童 がみられる	・丁寧な書字(ノート)指導	○丁寧な字を書くことを心掛ける 児童を増やす。	○ノートや宿題などの字を児童が振り返る機会 を設ける。	○宿題の漢字ドリルやノートなどの提出物や授業ノートを定期的に振り返るなど、手立 てができています。	A	
学 力 向 上 に 係 る 学 習 慣 ・ 生 徒 の 状 況	全国学力・学習 状況調査の質 問紙の状況	○学習に対する興味・関心・意欲は共に高い傾向に ある ○生活における規範意識は高い △英語の学習に対しての「好き嫌い」がはっきりと分 かれています	・苦手な学習に対する抵抗を少なくす る	○「自分の意見や考え」に自信を もって話すことができる児童を増 やす。 ○学習面でのきめ細やかな支援・ 指導で、「自分にいいところがある 」と自信をもって言うことので きる児童を増やす。	○低学年から少しずつ発達段階に応じた学習 に取り組む。 ○英語や国語など様々な教科において、つま ずきがある児童の支援に取り組む。	○困り感のある児童に対して、教師が関わり方を示すことで、周りの子の言葉がけ、支 えから自分の頑張りに気づくことのできている姿が見られてきた。 ○子ども達が頑張った時に、それを自分で認めることができるよう教師が声掛けをお こなってきた。 △国語や読書に対する興味が高いとは言えない。 ○学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと感じている児 童が多い。 ○学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりする ことができている。 ○学習した内容について、分かった点や良く分からなかった点を見直し、次の学習につ なげようとしている。 ○生活における規範意識は高い。	A	
	学校評価などの アンケート調査 による児童・生 徒の状況	○行事(運動会・音楽会)への意欲や達成感が高い ○授業に対して前向きである ○友だちとの関係を大切に考えられている △学校以外で自主的に学習をすすめることは難しい	・家庭学習の手引きの活用	○家庭学習の手引きを活用して 家庭での学習をすすめていくこ のできる児童を増やす。	○宿題や自主学習などの家庭での学習を定着 するように取り組む。	○各担任から適宜、子どもの学習進度、必要性に応じて宿題を出し、家庭学習の定着 を図っている。 △家庭学習の手引きはなかなか家庭にも子ども達にも浸透しにくい現状がある。今年 度は、家庭に手引きを配布した。来年度も引き続き、児童・保護者への啓発と家庭学 習への意識付けをしていかなければならない。	B	
校 内 の 研 究 状 況 ・ 研 修	校内研究の状況	○ICT機器を活用し、児童の思考が深まり互いにつな がり合える授業づくりを行ってきた ○プログラミング教育に積極的に取り組み、児童のプ ログラミング的思考の育成と、社会とのつながりを考 えられるような授業づくりを行った	・自分たちの身の回りや社会に目を向 けた取り組み(学習)につなげる	○児童が目的に応じたICT機器の 活用ができる。 ○プログラミング教育を行い、身 の回りや社会と繋げた学習に取り 組むことができる。	○ICT機器を活用する学習課題を設定し、活用 する 場面を増やす。 ○プログラミング教育と身の回りや社会など と関連づけた学習の設定を行う。	○ICT機器を活用した様々な授業実践があり、ICTを有効活用するための学習課題を 設定し、取り組むことができている。 ○プログラミング教育の授業が1年～6年まで通して行うことができた。これからのプ ログラミング教育の発展に繋がることが期待できる。 △個別と協働的な学習のバランスが大切なので、これからも引き続き意識しながら取 組む必要がある。	A	
	校内研修の状況	○プログラミング教育に外部から講師を招き、専門的 な知見や授業づくりへのアドバイスをもらった	・ICT活用やプログラミング教育の在り 方についての研修をする	○ICT機器を活用した授業づ くりができる。	○ICT機器を活用する授業に取 り組む。	○校内研修会でICTの活用やプログラミング教育について、学ぶ機会を設定すること ができ、様々な教員の授業作りに繋げることができた。	A	
家 庭 ・ 校 種 間 連 携	家庭・地域等の 状況	○家同士が遠く、遊び場が制限されることもあり放課 後に運動場で集まって遊ぶ児童が増えている ○学校運営に協力的であり、PTA役員を中心に新し い学校や行事の在り方を考えている	・行事での地域・保護者との連携協力 ・子ども・保護者・地域・学校にとってよ りよい行事の数や開催の形の検討	○行事に意欲的に取り組み、 達成感を感じることができる。	○行事の回数や内容の検討を行う。	○授業参観や学級懇談会等、行事の回数や内容の検討をしながら実施できた。学校 だよりや研究通信などを通じて、子ども達の学習の様子や学校での取り組みにつ いて情報発信をしてきた。来年度も、社会の情勢に合わせた形で子ども達の学びや頑 張りを様々な方法で発信していきたい。 ○地域指導者に来ていただくことで、効果的な学習ができた。 △これからも地域との繋がりを大切にしていきたい。	B	
	小・中における 教科連携等の 状況	○自然学校は小野・母子・志手原、修学旅行は小野・ 志手原で合同実施し、上野台中学校区で連携して行 事を行った ○3年生市内巡りは隣校区の松が丘と合同で実施し た	・学力向上に向けた小中、小中連携	○上野台中学校区との交流を 実施する。 ○中学校との連携を図ってい く。	○児童・生徒の様子を交流し、校区の状況を把 握するとともに児童生徒理解に努める ○6年生を中心の、児童の課題や実態につ いて中学校と交流の場をもつ	○高学年を中心に、宿泊行事をメインとして中学校区での交流を図ることができた。 ○4校交流会や上野台中学校の先生からの授業などの取り組みも継続して実施でき ている。 △他校と合同で取り組むことで、学校のねらいに沿った活動に取り組みにくい。	A	